

発表題目：  
舞踊とテクノロジーの交差点—AI・ロボットと変容する身体

所属：京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究

氏名：松倉祐希

1200字程度で発表内容を記載してください。

本発表では、申請者がダンサーとして参加した舞踊作品『Electro Asura and Artificial Sun』を事例に、AI時代における身体と知の変容について論じる。本作品は、台湾のニューメディア・アーティスト、韓国の振付家、そしてダンサーである申請者による国際共同制作として2024年に制作された。AIや機械的義肢といったメディア技術を導入し、人間と機械の境界を横断する新たな舞台表現を試みた点に特徴がある。これまでにソウルでのワーク・イン・プログレス上演、台北での没入型シアター公演、ニューヨーク・タイムズスクエアでのサイトスペシフィック・パフォーマンスなど、多様な都市的・文化的文脈において展開してきた。

作品においてダンサーは、「SUN」と呼ばれる会話型AIエージェントとリアルタイムに対話しながら、六道（地獄・餓鬼・畜生・人間・阿修羅・天上）を象徴的に旅する。SUNは輪廻における死の存在として設定され、その発話はしばしば踊り手の認識や感情を揺さぶる。舞台上で即興的に交わされる言葉は、振付の枠組みを先取りして身体を規定するものではなく、むしろその場で動きを変容させていく力を持つ。観客の前でAIと交渉し続けることは、舞踊における即興性を拡張するとともに、踊り手の主体性を流動化させる経験となった。

さらに、ロボットアームとのダンスにおいては、人間的な観客の視線と機械的な非人間的まなざしが交錯する状況が立ち上がる。ダンサーはロボットの運動と対峙し、その予測不可能な動きや人工的な触覚に応答するなかで、自らの身体の延長性と脆弱性の双方を体験することとなった。従来の舞踊における身体技法が師弟関係や模倣を通じて継承されてきたことを踏まえるなら、ロボットアームとの接触はこうした伝統的な学習回路を再生産しつつ攪乱し、別様の習得や変容の回路を開く出来事といえる。この経験は、舞踊における「身体知」が環境的・技術的要因によって再構成されうることを示すと同時に、人間と機械の境界を横断する「サイボーグ的な身体」の在り方を浮かび上がらせる。

本発表の方法論的基盤となるオートエスノグラフィーは、個人的な身体経験を一次資料しながら、それを社会的・理論的文脈に接続していく営みである。本発表においても、ダンサーとしての経験を記述し分析することを通じて、メディア技術と身体知の関係性を浮かび上がらせる。その際、ダンサーの身体に刻み込まれた習慣的知がAIやロボットといった技術的環境のもとでどのように揺さぶられ、パフォーマンスにおいてどのように再編されるのかを検討する視座を得ることができる。さらに、人間／非人間の境界が交錯する舞台実践を、現代的な知の継承のあり方として捉え直すことが可能になる。

以上の検討を通じて本発表は、芸術とテクノロジーの交差点に立つパフォーマンスを素材としつつ、身体知の生成過程を理論的に位置づけることで、学際的な議論への接続を目指すものである。